研究ノート

幼稚園教諭および保育士を志望する大学生の運動指導に対する意識調査

井川　貴裕*1

キーワード：幼稚園教諭、保育士、運動、心配

1　はじめに

現代の子どもの遊びは社会環境や自然環境の変化によって大きく変わりつつある。その原因として、科学技術の発展によるパソコンやゲーム機などの普及、都市化による外遊びの空間の減少、少子化による兄弟姉妹の数の減少などによる遊び仲間の減少などが挙げられ、子どもの運動能力に大きな影響を及ぼしていると考えられる [1)]。文部科学省の「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方」において、幼児期に積極的に運動を実践している幼稚園を卒業した小学生は、そうでない小学生に比べ、新体力テスト（握力、長座体前屈、上体起こし、反復横跳び、20m シャトルラン、50m 走、立幅跳び、ソフトボール投げ）において、すべての項目で得点が高かったと報告している。また、体力面だけではなく、運動を長期的に継続していくことで、生活習慣の改善、やる気の向上、一緒に遊ぶ友だちの増加にも影響を与えたと報告している [2)]。また、2012 年に策定された幼児期運動指針において、多くの幼児が体を動かす実現可能な時間として、幼児は様々な遊びを中心に、毎日、60 分以上、楽しく体を動かすことが大切であると呼びかけている [1)]。幼児は心身全体を働かせて様々な活動を行うので、心身の側面の発達にとって必要な経験が相互に関連し合い積み重ねられていく。このため、幼児期において、遊びを中心とする身体活動を十分に行うことは、多様な動きを身につけるだけでなく、心肺機能や骨形成にも寄与するなど、生涯にわたって健康を維持したり、何事にも積極的に取り組む意欲を育んだりするなど、豊かな人生を送るための基礎づくりとなることから、体力・運動能力の向上、健康的な体の育成、意欲的な心の育成、社会適応能力、認知的能力の発達といった様々な効果が期待できるといわれている [1)]。このように、幼児期の運動は、心身の発達に重要な意味を持つものである。

先行研究により、幼児期の運動に対して保育者の関りについて検討されてきた。石井ら（2011）は、先生と遊んだと感じる度合いが強い子どもは、活動量が増え、楽しかった、運動が好きと強く感じていると報告しており、保育者の介入行動が幼児の運動意識および活動量に有効な影響を与えると示唆している [3)]。また菊池ら（2002）は、活動的な保育内容にすることで、普段活動量の少ない幼児の運動量を効果的に増加させることが出来ると述べている [4)]。以上のことから、幼児の運動量を高め、運動に対する意欲を向上させるためには、保育者の運動に対する幼児への働きかけは重要な要素となることが考えられる。

しかしながら、及川（2012）によると、多くの保育者を志望する大学生は幼児の運動指導に対して心配に感じている傾向があると報告している [5)]。このような現状だと、大学生が保育者になった際に、幼児への効果的な運動指導は難しく、幼児の活動量を高めるような保育を行えない可能性が考えられる。しかし、丸井ら（2015）は、体育授業でグループ学習を行っていくことで、それらの心配が軽減したと報告し、授業内容を工夫することで運動指導に対する心配を少なくできる可能性を示した [6)]。現在筆者が所属する S 大学では、1 年生時に幼児の運動に関する授業があるが、専攻に分かれて専門的に学んでいく 2 年生以降では幼児の運

*1　至誠館大学　ライフデザイン学部

動に関する授業が存在せず、教育実習や保育実習などの幼児と実際に関わる実習でしか運動と関わる場面が存在しないことになる。保育者養成機関として、保育現場で働く際に幼児の運動に対する心配を軽減させ、より効果的な運動指導が行える保育者を養成できるかが課題であると考えられる。そのため、保育者を志望している大学生がどの様な不安を抱えているのかを調査し、学年別の運動指導に対する心配を明らかにすることによって、効果的な授業を展開できると考えられる。

そこで本研究は、筆者が所属しているＳ大学に在籍している保育者志望の大学生を対象として、幼児への運動指導に対する心配を学年別に比較検討していくことを目的とする。

2　方法

1 ）調査対象

2017 年度にＳ大学に在籍し、幼稚園教諭または保育士の資格取得を目指している大学生 26 名（2 年生 : 11 名、3 年生 : 7 名、4 年生 8 名）を対象とした。Ｓ 大学では、2 年生以降から専攻に所属し、より専門的な勉強を行っていくため、対象から 1 年生を除外した。

2 ）調査内容

調査内容は運動に対する心配に関する質問項目を設け、各項目のアンケート調査を行った。アンケートはインターネット上で作成し、対象学生にアンケートへの回答を依頼し配信を行った。運動に対する心配に関する質問項目は、5 件法のアンケート調査を行い、「1. まったくあてはまらない」、「2. あまりあてはまらない」、「3. どちらともいえない」、「4. ややあてあまる」、「5. あてはまる」として項目を設定した。質問項目においては、丸井ら（2015）が作成した項目を用いた[5)]。質問項目は表 1 の通りである。

表１　心配の質問項目

	質問項目
問 1	子どもを安全に運動させることができる
問 2	運動の苦手な子どもへの配慮ができる
問 3	どの運動を教えるべきか理解している
問 4	体育に関わる行事予定を理解している
問 5	子どもが自分の教えていることを好意的に評価してくれる
問 6	自分が模範を示せない種目の運動を教えられる
問 7	指導の際に 1 人ひとりの子どもを把握できる
問 8	子どもの行動をコントロールできる
問 9	今の自分では子どもたちに悪い影響を与えてしまう
問 10	子どもの運動のつまずきを診断できる
問 11	運動用具の準備や施設の管理ができる
問 12	同じ教員、保育士に認められ受け入れられる
問 13	各種目に必要な運動技能を指導できる
問 14	子ども同士の協力的な関係をつくる
問 15	教員、保育士の前でうまく行動する
問 16	運動技能を向上させる指導ができる
問 17	いろんな子どもたちのニーズに合わせる
問 18	よい運動指導ができる
問 19	子どもたちに運動を好きになってもらえる
問 20	子どもたちに運動を通して自信を持たせることが出来る
問 21	子どもたちに運動を通じて健康になってもらえる
問 22	子どもたちに上手に伝えることができる
問 23	効果的な学習形態をつくれる
問 24	子どもの気持ちに共感することができる
問 25	子どものつまずきを解消する指導ができる

4 ）統計処理

運動に対する心配に関する質問項目に対して、一元配置分散分析で学年ごとの比較を行った。さらに。有意差が見られた場合、多重比較（LSD 法）を行った。なお、すべてのデータ加工および統計処理解析には SPSS Statics Base Ver23 を用いた。

3　結果

結果を表2に示した。

運動指導に対する心配に関する質問項目を学年ごとに比較を行ったところ、問1（F= 5.03 , p<.05）、問3（F= 3.79 , p<.05）、問13（F= 3.98 , p<.05）において有意差が見られた。多重比較（LSD法）を行ったところ、問1において2年生に比べて3年生（p<.05）および4年生（p<.01）の値が有意に低く、問3および問13においては2年生に比べ4年生（p<.05）の値が有意に低い結果が認められた。

表2　学年別運動指導に対する心配

平均値（標準偏差）

	2年生	3年生	4年生
問1	3.64（.674）	2.71（.488）	3.04（1.195）
問2	3.36（1.027）	4.00（.577）	2.88（.853）
問3	3.73（1.009）	3.43（.976）	2.50（.926）
問4	3.55（.688）	3.00（.577）	3.38（1.302）
問5	3.36（.674）	3.14（.690）	3.13（1.246）
問6	3.55（.688）	3.43（.787）	3.50（1.069）
問7	3.45（.820）	3.43（.787）	3.13（.835）
問8	3.64（1.027）	3.43（.787）	3.25（1.035）
問9	3.45（1.036）	3.14（.900）	3.38（.916）
問10	3.55（.934）	3.43（.787）	3.13（.835）
問11	3.27（.786）	2.71（.951）	3.00（.756）
問12	3.73（.905）	3.43（.535）	3.50（.758）
問13	3.82（.603）	3.57（.976）	2.88（.641）
問14	3.36（.809）	2.57（.787）	2.63（.916）
問15	3.55（1.036）	3.57（.535）	3.25（1.035）
問16	3.36（.924）	3.43（.787）	2.75（1.035）
問17	3.64（.809）	3.00（.816）	3.00（1.069）
問18	3.55（1.214）	3.29（1.113）	3.25（1.165）
問19	2.73（1.191）	2.86（.900）	3.25（1.165）
問20	3.18（1.168）	3.00（1.000）	2.75（.707）
問21	2.82（1.328）	3.00（.816）	2.75（.707）
問22	3.64（1.027）	3.43（.976）	3.25（1.165）
問23	3.73（.647）	3.43（.976）	3.00（1.069）
問24	2.55（.934）	2.71（.756）	2.13（1.126）
問25	3.55（.820）	3.14（.900）	3.25（.886）」

4　考察

本研究の結果から、運動指導に対する心配に関する項目のうち、「子どもを安全に運動させる」、「どの運動を教えるべきか理解している」、「各種目に必要な運動技能を指導できる」においての2年生に比べ、上級生の値が小さい結果となり、上級生は2年生よりも運動指導に対する心配は少ないということが明らかとなった。岡澤（2016）は保育者と大学生の運動遊び場面の内発的動機付けを高める言葉かけを比較したところ、大学生は運動のイメージを先に伝える、コツを教えてしまうなど、技能に関する言葉かけが多くみられたと報告している。一方、保育者は、指示的な言葉かけを行うが、そのほとんどが危機回避のための言葉かけであったと報告している[7)]。本研究において、3、4年生が2年生に比べ安全に運動させることに対する心配が少ない結果となったのは、実習を経験し子どもと実際に対峙したことで安全面に関する心配が少なくなっていると考えられる。その他2つの項目は、子どもの運動指導に関する項目であり、2 年生は実際に教える経験が少ないため心配と感じる学生が多くなったと考えられる。丸井ら（2015）は、これらの心配は、授業におけるグループ学習や実際の子どもと対峙して直接指導することで解消されると述べている[6)]。保育者養成機関として、運動指導への自信を身に付けさせ、不安を解消していくような授業展開を行っていくことが今後の課題である。そのために、幼児の運動に関する授業で大学生同士のグループ学習を増やしたり、近隣の保育園、幼稚園と連携を取りながら、2 年生の段階から実際に子どもに運動の指導を行う機会を増やす必要があると考えられる。

[参考文献]

1) 文部科学省：幼児期運動指針，2012
2) 文部科学省：体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方，2011
3) 石井友光、古谷優：保育者の介入行動が幼児の運動意識及び活動量に及ぼす影響ー幼児の運動に対する意識調査との関係ー，22（2）：49‐57，2011
4) 菊池透、山崎恒、亀田一博、樋浦誠、仁科正裕、内山聖：保育所における保育士の働きかけと運動量との関係，小児保健研究、61（3）：470‐474，2002
5) 及川直樹：保育者養成における学生の運動指導に対する自信の実態と関連要因の検討，幼児体育学研究，4（1）：41‐52，2012
6) 丸井一誠、井邑智也：女子短大生における幼児への運動遊びの指導に関するグループ学習の効果，金沢星稜大学人間科学研究，9（1）：31‐34，2015
7) 岡澤哲子：運動遊び場面の保育者の言葉がけに関する保育者養成における指導者上の観点についてー内発的動機付けを高めることをねらいとしてー，帝塚山大学現代生活学部紀要，12：57‐64，2016